

## 出張報告 「国際的視点からの宗教文化教育教材の総合的研究」イギリス調査

「国際的視点からの宗教文化教育教材の総合的研究」では、これまでの宗教文化教育に関する調査研究、作成してきた教材を踏まえ、さらにグローバル化のなかで国際的視点から取り組むべき課題について検討してきた。そのもっとも重要な点である国際的視点からの研究という部分について、より実質化していくために、多文化宗教教育に関して蓄積のあるイギリスにおいて、先行的な取り組みを行っている機関を訪問し、宗教文化教育に関わる教員と議論を深めることとした。調査の概要を以下に記す。

### ○2月23日（火）

宗教文化教育の教材調査のため、カンタベリー大聖堂を訪問。カンタベリー大聖堂は、イギリス国教会の総本山である。カンタベリーのアウグスティヌスによって602年に建設された。現在の姿は、ゴシック様式の美しい建築で知られる。この聖堂では、1170年イングランド王ヘンリー2世と対立していたトマス・ベケット大法官が暗殺されている。ベケットはその後、殉教者として列聖され、遺体の眠るこの聖堂には多くの巡礼者が訪れるようになった。かの『カンタベリー物語』はその巡礼者たちを描く作品である。

本研究では、「世界遺産と宗教文化」についてのデータベースを作成し、公開している。カンタベリーについては、記事はあるものの、写真等の教材が未だなかったため、HPで公開するための教材写真の撮影を行った（現在は写真も公開している）。また現在の国教会をめぐる世俗化の問題等を考察した。



カンタベリー大聖堂

### ○2月24日（水）

ノリッジへ移動し、セインズベリー日本芸術研究所を訪問し、イースト・アングリア大学のサイモン・ケイナー Simon Kaner 教授と今回の調査の趣旨についてディスカッションを行った。その後ノリッジ大聖堂について、教会のボランティアの方に案内をお願いし、教会の歴史や教会建築の特徴等について詳しくお話を伺った。

イースト・アングリア大学では、multi faith centre を訪問し、チャプレンの Darren 氏と



セインズベリー日本芸術研究所でサイモン・ケイナー先生と

面会。イースト・アングリア大学における多宗教の共生の状況や現在抱えている問題、センターの活動内容などをインタビューした。Interdisciplinary Institute for the Humanities の責任者である John Charmley 教授とも面会し、宗教文化教育の必要性について、日本の文脈について説明し、イギリスの状況についてもお聞きした。



Multifaith CentreでDarren氏と

Sainsbury centre for visual arts をガイドの方の案内で調査した。大学美術館・博物館の有する作品の教材としての活用について考察を行った。

夕方には、日本学の情報交換会に出席し、井上教授が参加教員、学生の前で調査の趣旨と宗教文化教育の取り組みについて紹介した。



イースト・アングリア大学日本学情報交換会で井上順孝教授が趣旨説明

○2月25日(木)

イースト・アングリア大学のサイモン・ケイナー教授の紹介で、ケンブリッジ大学名誉教授で日本学が専門の Richard Bowring 先生に面会し、宗教文化教育について意見交換を行う機会を持った。

Bowring 先生に今回の「国際的視点からの宗教文化教育教材の総合的研究」の趣旨や國學院大學も積極的に活動に関わっている宗教文化教育推進センターの宗教文化士制度などについて詳しく紹介をした。

その上で宗教文化士の試験問題のうち 200 問を英訳した *Workbook for Learning Religious Culture in Japan and the World* の見本をお渡しし、国際的視点からの教材としての可能性について意見を伺った。

Bowring 先生は、われわれの取り組みに対し高い関心を示し、その場で熱心に同 *Workbook* を読み、いくつか重要な意見を述べられた。なかでもケンブリッジ大学の授業においては、知識を得る学習というスタイルではなく、ディスカッションが重んじられることから、正答を選ぶという形式の問よりも、なぜこのような問が成立するのかという方向へ関心が向くだろうという指摘は大変興味深かった。国、あるいは大学の文化によって授業運営には大きな違いがあり、学生の関心や習熟レベルもさまざま異なっている。そのなかで今回の *Workbook* がどのような使われ方をするのか、ただ、回答と解説に留まらない多様な使用法の可能性があることが示されたと考える。

Bowring 先生は、われわれの研究の参考に、ということでケンブリッジ大学図書館に案内して下さった。図書館では日本部の主任である Kristin Williams 氏の説明を受けながら、日本関連の書籍コーナー、書庫を見せていただいた。

ケンブリッジ大学には、大学の幅広い研究活動と長い伝統を示すように、いくつかの博



ケンブリッジ大学図書館

物館がある。そのなかで宗教文化教育の教材研究という立場から、考古学人類学博物館を訪問調査した。その後ケンブリッジ大学のキングスカレッジチャペル、ラウンドチャーチなどの宗教施設にて宗教文化教育の教材作成のための写真撮影や情報収集を行った。

○2月26日（金）

午前中は、ウェストミンスター寺院、ならびにウェストミンスター大聖堂(カトリック)の調査を行った。ウェストミンスター寺院は、世界遺産に登録されているが、現在本研究で作成しているデータベースでは、まだ記事を作成していない。その作成のための写真撮影や取材を行った。イギリス国教会の施設との比較のために、カトリックのウェストミンスター大聖堂も訪問し、ミサの様子などを観察した。

午後には SOAS の宗教学・哲学部で日本宗教の授業を担当している Tatsuma Padoan

講師に面会し、授業の内容や使用しているテキスト、ビデオなどについて話を伺い、日本側で取り組んでいる宗教文化教育については、教材としてどのようなものを求めるかなどの意見を聴取した。

夕方には、SOAS の日本学の Alan Cummings 氏と面会し、Cummings 氏の行っている日本宗教の授業の内容、学生の関心や、授業の構成上の課題などを話し合った。

○2月27日（土）

午前中に大英博物館の所蔵する資料から、宗教文化教育の教材として活用できそうなものを検討するため、調査を行った。とくに日本関係の資料、仏教、キリスト教、古代宗教についての教材を重点的に調査した。

今回の調査では、イースト・アングリア大学、ケンブリッジ大学、ロンドン大学 SOAS と設立の時期や特色の全く異なる3つの大学を訪問し、それぞれのところで研究者と面談をし、宗教文化教育について議論を深めることができた。日本側の取り組みについても十分に理解をしていただき、今後の研究について協力関係を築くことができた。宗教施設の訪問についても、英国国教会の施設だけでなく、カトリックも比較的調査することができ、イギリスのキリスト教について多面的な見方が必要であることがわかった。全体としてきわめて大きな実りのある調査ができたと考える。

(平藤喜久子)